

カルチュラル・スタディーズ学会

# Association for Cultural Typhoon

2024 年度カルチュラル・タイフーン

公募が始まりました！

代表幹事 小笠原博毅

学会員のみなさん

学会へのご支援ご協力にあらためて感謝申し上げます。新年度になり早くも一ヶ月以上過ぎました。この間、学会誌『年報カルチュラル・スタディーズ』の編集作業が進みました。投稿してくださった方々、また査読者の方々、どうもありがとうございました。

この「査読」というシステム。賛否はありますが、現在の日本の学术界では「査読有り」の媒体への論文投稿が「業績」としてカウントされ、それによって研究職への就職の可否が判断されるのが現実です。若手やポスト研究者の機会の選択肢をできるだけ広く保つためにも、学会誌におけるこのシステムは維持する必要があります。この点へのご理解をいただければ幸いです。

そのうえでお願いがございます。公平性を期すために、学会では一本の投稿につき二名の査読者に、編集委員会の指名によって査読のお願いをしています。校務、研究、

生活でお忙しいことは承知のうえでのお願いとなってしまいます。どうしても事情が許さない状況でない限り、編集委員からのお願いにはできるだけお応えいただけますよう、あらためてお願い申し上げます。そして、査読はたとえば英語では peer review といい、あくまでも同等の「同僚」による読後審査を意味します。決して「指導」ではありません。学述論文としての質と形式がどこまで整えられているのか、それを厳正かつ公平にご判断いただくものですから、あまりにも大雑把な評価も、あまりにも高圧的と受け取られかねない評価も、ともに慎んでいただきたいのです。

論文を投稿されるみなさんにもお願いがございます。みなさんのなかには博士課程在籍中や博士課程を終えられたばかりの方も多いことでしょう。研究成果を世に問う、という初めての経験をされる方も多と思います。自分の研究や文章が赤の他人にど



のように受け取られるのか、はたして理解されるのか、不安の中での投稿ということもあるでしょう。そこで、ご自分の指導教員や研究分野の近しいご友人、知人、ライバル、それが年長者でも年少者でもかまいませんので、「自分以外の誰か」にまず草稿を読んでもらって下さい。そしてその方々の読後意見を受けて修正したものを投稿して下さい。査読は校正の機会でも論文指導の場でもありません。研究の専門性と同時に、研究者としての専門性（態度や身構え、その分野のプロフェッショナルということですが）もまた、学術誌への投稿条件なのです。

論文の形式（章や節の付け方、注の付け方、参考・引用文献リストの作り方）も、投稿する以前に身につけておかなければならない条件です。形式をきちんと揃えるだけで、あなたの論文は格段に「読まれる」ものになります。そして査読者の方々の余計な負担も減り、内容をしっかり吟味できます。どうぞこの点、くれぐれもご理解下さい。

「年報」は、研究発表の機会でもありトレーニングの場であることは当然ですが、準備体操もせずいきなり冷たい水に飛び込んでは本当の実力も発揮できないでしょう。ウォーミングアップはご自分でしっかりと。そのうえで、意欲に溢れ冒険心に満ちたご投稿をお待ちしております。

\*\*\*\*\*

本号には、昨年の早稲田カルタイのトリとして大きな反響を呼び起こしたシンポジウム、「トランスジェンダーの物語とエンパワメント」で司会を務めていただいた岩川ありささん（早稲田大学）にご寄稿いただきました。急なお願いにも関わらずお引き受けいただき、深く感謝申し上げます。

そうです、カルタイです。「イカリを上げる？（Anchor / Anger Aweigh?）」をテーマに、例年通り個人発表、グループ発表、プロジェクト・ワークスの3つのカテゴリにて神戸カルタイの公募が始まりました。詳しくは学会HPの「大会宣言」と「公募要領」をご覧ください。学会員のみならず、研究仲間や周囲の方々への呼びかけもよろしくお願いします。国内外からの積極的な応募を、実行委員一同お待ちしております。

実行委員会もすでに5回を数え、概要が固まってまいりました。史上初の分散開催となる神戸大会ですが、一方の会場である西灘・水道筋界隈でさまざまな活動に従事されている店主さんや地域イベントの企画コーディネーターの方々とも緊密に連携を取りつつ粛々とプランを練っております。

嬉しいことに、灘中央市場という昔からの商店街との共催が実現しました。そしてなんと、市場全体を会場として使わせていただけることになりました！市場内の休憩所や空き地スペース、通路や使われていない店舗スペース、買い物客が普段に通る通路など、日常空間の内部にカルタイが出没できるよう取り計らっていただけることになりました。主にプロジェクト・ワークスの会場となりますが、研究発表の会場としても素晴らしい場所を提供していただけることになりました。寛大なオファーをいただけたことに感謝し、素晴らしい場所を目にしてインスピレーション（妄想？）が沸き続ける今日このごろです。みなさん、お時間あればぜひ一度灘区の水道筋界隈にお越し下さい。実行委員のアテンドで灘の「台所」をご案内いたします。

他方で、KIITO（デザイン・クリエイティ



ヴセンター神戸)で催される学会主催シンポジウムも、(ほぼ)テーマとラインナップが確定してまいりました。「西灘水道筋の(生暖かい)挑戦」、「港町パンク始末」、「怒りとともに錨をあげてネオ・リベに抗う」(全て仮!)という3つのシンポジウムを、そして「近代スポーツ発祥の地で考えるスポーツの“いま”と“これから”(これも仮!)というミニ・シンポジウムを企画します。KIITO 脇の「みなとの森公園」もサブ会場になるようです。どんなシンポジストが何を話すのか、推測してみてください!

実行委員会と並行して研究会も進められています。以下はこれまでのラインナップです。

第1回 2023年12月22日(金)

坂本友里恵(mottiflab代表)「いちばたけの試み」  
岩田かなみ(SoWelu)「地域と関わる事業の挑戦」

第2回 2024年2月22日(金)

Yosri Razgui(神戸大学大学院博士後期課程)  
「ヴィッセル神戸ファンダムと都市の記憶」  
松本淳也(神戸大学大学院博士前期課程)

「神戸におけるストリート・バスケット—みなとのもり公園のフィールドワークから」

第3回 2024年3月19日(火)

Špela DRNOVŠEK ZORKO (Promis, 神戸大学)  
"Migration, Memory, and Names: Thinking about Kobe from Other Places"

第4回 2024年4月19日(金)

渡邊順祐(神戸市民)  
「“怒り”とともに歩く神戸—街歩きのための一つの羅針盤」

\*\*\*\*\*

世界の暴力は留まるところを知りません。規模の大小を問わず、国内でもイスラエルによるパレスチナ人虐殺に反対し、イスラ

エル製品のボイコットやイスラエル企業と取引している日本企業へ抗議するための集会やデモがたくさん実施されており、学会員のみなさんのなかにも参加されている方々が多いと思います。昔とある報道写真家が、「同情は連帯を拒否したときに始まる」と言いました。「可哀想」ではなく、どうやってそれを止めることができるかを、カルタイ実行委員会を中心にパレスチナについて、いまパレスチナで起きていることについて、より深く考える機会を設けたいと考えています。追って告知しますので、ご協力よろしくお願いします。

\*\*\*\*\*

最後になりますが、NPO 法人関西ブラジル人協会 CBK の松原マリナ代表が、去る3月19日お亡くなりになりました。前回の2011年神戸カルタイでの共催をきっかけに、その後も長く交流をさせていただきました。カルタイが結んでくれたご縁です。心よりお悔やみ申し上げます。



### 第6期第6回幹事会（臨時幹事会）議事録

日時：2024年3月6日午前10時～正午

出席者：小笠原、竹田、川端、山本

欠席者：菊地、田中、井上

#### □編集委員会

・編集委員長より次号の年報第12号への投稿総数が報告されるとともに、査読を通過する論文の数によっては次号年報の総ページ数を増やす必要があり、今年度の発行費の見通しが議論された。

・今後の査読ガイドラインならびに投稿規定の見直しについてこれまでに引き続き意見交換をおこなった。

#### □学术交流

・ガッサン・ハージ氏がマックス・プランク研究所の客員教授の職を解雇されたことにたいして、学会有志の単位で同研究所に公開質問状を送付することを決めた。

### 第6期第7回幹事会議事録

日時：2024年4月15日午前10時～正午

出席者：小笠原、菊地、田中、竹田、川端、井上

欠席者：山本

#### □大会委員会

・開催校実行委員長を兼務する代表幹事より、神戸で開催される今年度のカルチュラル・タイフーンの準備状況が報告された。

・【事務局追記】当初、幹事会での確認を経て4月15日より各種公募を開始する予定であったが、実行委員会事務局の立ち上げに時間を要する結果となり、公募開始は5月2日となった。

#### □編集委員会

・投稿論文の査読進捗状況が編集委員長より報告され、掲載論文数が大きく増えるこ

とが確実であることが報告された。

・今年度の年報発行費の増額について幹事会です承した。

・特集「言葉の力」の締切を延長することが確認された。

・編集委員会の体制、投稿規定、査読体制について見直しを検討することをあらためて確認した。

#### □研究企画委員会

・今年度の神戸でのカルチュラル・タイフーンと連動した企画を東京でおこなう予定であることが報告された。

#### □学术交流

・マックス・プランク研究所から定型文による返信があったことが報告され、今後の対応について意見交換をおこなった。

#### □事務局

・2023年度末での退会者について、自然退会者35名、希望退会者6名、合計41名であったことが報告された。

・若手研究会活動助成の公募を今年度もおこなうことを確認し、予算上限を6万円とすることを承認した。

・ニューズレター第3号の紙面構成について意見交換をおこなった。

・【事務局追記】2023年6月から2024年4月まで56名の入会申請について、第6回幹事会後の持ち回り審議によって承認した。

・カルチュラル・スタディーズ学会選挙規則第5条第2項ならびに第3項に沿い、今年度実施する幹事監査選挙について、選挙公示日を2024年7月26日（金曜日）、投票締切日を2024年8月23日（金曜日）とする予定であることを第6回幹事会後の持ち回り審議によって確認した。



## 開催校実行委員会第2回研究会報告

多田 友里子 (神戸大学)

2024年2月22日、カルチュラル・タイフーン2024に向けた第2回研究会が、実行委員会終了後に神戸市灘区王子公園のスタジオ SoWelu にて行われた。「神戸、スポーツと都市」と題し、ラズギ・ヨーズリ氏(神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程)、松本淳也氏(神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程)の二名が発表を行った後、質疑応答のセッションが設けられた。

まずヨーズリ氏からは、「ヴィッセル神戸ファンダムと都市の記憶」というテーマで発表があった。ヴィッセル神戸誕生の過去を振り返り、サッカーの国際的側面を取り入れたことや、日本プロ野球に伴う戦後からの時間的な歴史の代替としてチームの歴史＝記憶の形成をファンダムが担っているということが指摘された。具体的には、フランス歌手 Edith Piaf 『愛の讃歌』を原曲としたヴィッセル神戸の応援歌「神戸賛歌」に見られるように、同チームが発足した1995年の阪神淡路大震災を共通の記憶として掲げることにより、都市生活への根付きと結束が生まれていることを確認した。

続いて松本氏からは「神戸におけるストリート・バスケ——みなとのもり公園のフィールドワークから」というテーマで発表があった。松本氏は、一般的な公式試合のように室内コートで行われるものを「組織的バスケ」、屋外にて固定的な人員編成や制限時間なく行われるものを「ストリート・バスケ」として区別しており、後者の特徴を神戸市内はみなとのもり公園を事例に紹介された。時間帯や複数コート内において利用者

の微妙な棲み分けが見られることや、台湾／香港と比較したチーム編成とルールに関わる神戸独自の地域性、組織的バスケとは異なったスポーツの楽しみ方があることなどを指摘していた。

サッカーとバスケという2つのスポーツから偶発的に生まれる文化に着目したとき、神戸の市民生活にどのようにしてそれらが包含、場合によっては排除されているのかということについてより身近に考えることができる機会となり、カルタイ本番でのスポーツ・セッションが楽しみになった。■



## カルチュラル・スタディーズ学会のジェンダー平等と ダイバーシティ推進について

ジェンダー平等推進担当幹事 竹田 恵子（東京外国語大学）

カルチュラル・スタディーズ学会は2023年度（第6期）にはじめて「ジェンダー平等推進委員会」を発足させた。竹田恵子と菊地夏野氏で構成される委員会では、ジェンダー/セクシュアリティ、人種や国籍等をめぐる差別をなくし、より良い学びと交流のための環境を整えることを目指している。そのため、2023年3月13日～4月10日（342名に送信）、4月13日～4月27日（324名に送信）に学会関連活動時のハラスメント等の実態調査のためアンケートを実施し、会員の3分の1以上の119名からの回答があった。なお、回答を強制しなかったため、設問によっては回答者が119名に達しないものもある。2023年度学会大会ではその結果発表を行ったため、概要を述べる。

まず、回答者の属性を述べる。回答者の年齢は30代と40代がほぼ同数で30%程度（32～33名）と最も多かった。次に50代が15.6%（17名）と多くほぼ同数の20代と続いた。回答者の身分は常勤教員または常勤研究員が50.5%（55名）と半数を超えており、次いで博士後期課程院生が25.7%（28名）、次いで非常勤教員・研究員、その他と続く。学部生は0名であった。ジェンダー・アイデンティティに関しては、シスジェンダーの女性が多かった。シスジェンダーの女性が45.0%（49名）、次いでシスジェンダーの男性が38.5%（42名）であった。ノンバイナリーが9.2%（10名）、わからない/決めたくない者も5.5%（6名）存在した。

つぎに、学会活動時のジェンダー平等やダイバーシティへの取り組みの実態について述べる。「カルチュラル・スタディーズ学会におけるジェンダー平等はどの程度達成されていると思いますか？」という設問に対し、「ある程度達成されている」が65.1%（71名）と最も多かった。「あまり達成されていない」が20.2%（22名）と次いで多く、「かなり達成されている」は10%程度（11名）で「全く達成されていない」は4.6%（5名）であった。「（前述の設問の答えに対して）そのように思う理由を挙げてください。いくつでも、自由に書いてください」という設問（自由回答全55件）においては、幹事や学会員に女性の割合が比較的多いからという意見、学会テーマや研究発表にジェンダーやフェミニズムを取り上げているからという意見が多く見られた。しかし一方で、中高年男性が大きな権力を握っており重要な役職者にまだ女性が少ないという指摘も見られた。

「カルチュラル・スタディーズ学会における多様なセクシュアリティへの理解はどの程度あると思いますか？」という設問に対して「ある程度はある」が61.1%（66名）、次いで「かなりある」が29.6%（32名）であり、全般的に理解度は高いことが推測できる。その理由は（自由回答全50件を分析）、大会の研究報告のテーマにセクシュアル・マイノリティ関連のものがあるから、このようなアンケートの取り組みがあるからという意見が多かった。しかし、ジェンダーよりもセクシュアリティに関する平等は見えづらく、また表面上は理解があるように見えるが実践的にはそうとは思えないという意見も見られた。



さらに、学会関連活動時にハラスメントなどの被害を見聞きした者は19.3% (21名) おり、ハラスメントなどの被害を受けた者も8.3% (9名) いることが明らかとなった。

さらに、今後の環境整備について述べる。学会により良い環境を整備できるような仕組みがあった方が良いか? という設問に対して「はい」と答えた回答者が90.6% (96名) と大多数であることがわかった。さらにどのような仕組みが良いかを問うた設問(複数回答可)の回答は、「ジェンダーのみならず、人種・民族、セクシュアリティなどを含めた多様性を尊重するためのガイドライン」を望む者が84名と最も多く、「相談窓口体制」が67名、「ハラスメント防止ガイドライン」が66名、「ジェンダー平等を推進するためのガイドライン」が45名、「その他」が11名であった。

したがって、今後はジェンダー平等のみならず、人種・民族、セクシュアリティなどを含めた多様性を尊重するための包括的なガイドラインを整備するべきであろう。本学会には、これまでずっと多様性を尊重する方向性があったのだろうが、この取り組みにより、学会内の実態がより詳細に明らかになった。よりよい学びの機会が得られる環境を提供する努力を怠ってはならない。

筆者は美術教育機関のジェンダー／セクシュアリティ教育を推進する団体である EGSA JAPAN の代表をつとめている(詳細：<https://egsajapan.com/>)。その活動の一環としてハラスメント防止ガイドラインを無料で配布している。他にも美術大学におけるジェンダー／セクシュアリティ教育の実態調査を行っているが、ハラスメントは誰でも、する可能性もされる可能性もある。また、ハラスメントは当該集団内の権力関係に連動して起こる可能性が高く、過重労働や不安定な雇用、低賃金など、労働環境の脆弱性とも関連している。それらとアカデミアもまた、無縁ではない。より良い学びと交流の場を提供するために不断の努力が必要とされるだろう。

EGSA JAPAN 制作のハラスメント防止ガイドラインのDLは以下のフォームからお申込みください

[https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScs\\_z0-VQW9y7Sp22Bc8XVCk\\_DSbtlkUmFoGWyqKAaJ-zh11Q/viewform](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScs_z0-VQW9y7Sp22Bc8XVCk_DSbtlkUmFoGWyqKAaJ-zh11Q/viewform)



## トランスジェンダーの物語とエンパワメント

岩川 ありさ（早稲田大学）

今日のシンポジウムで、「孤立」という言葉がとても胸に刺さりました。今、自分がなりたい自分になろうとする人を殺すような言説が、現実社会にも、インターネット上にもあふれています。しかし、自分自身が生きている現実について伝えようとする物語も、たくさんありましたし、たくさん生まれようとしています。けれども、その物語に耳を澄ませたり、聴いたり、全身で感じなければ、ないものにされてしまう。だから、物語とエンパワメントが大事なのです。同時に、苦しすぎて、傷が深すぎて、自分自身がそれについて何も語れず、沈黙している場合もあると思います。その沈黙への敬意というものも必要だと思います。

精神科医の宮地尚子さんは、『環状島=トラウマの地政学 新装版』（みすず書房、2018年）の中で、「声をあげつづける人たちへの敬意と、声をあげられない人たちへの想像は両立するはずである」と書いています。

今回のシンポジウムで話したことは、まだ最初の一步です。これから継続していきたいと思います。ここに参加してくださっている皆さん、zoomの前にいる皆さん、ぜひ様々な書籍が出版されていますので読んでください。そしてメディアの皆さん、どうかこれらを読んで、正しい情報を伝えてください。誰かをおおるのではなく、誰かが生きるための報道へ、移り変わってほしいと思います。

今回のカルチュラル・タイフーンは「新しい戦（中）前とフェミニズム」というテーマでした。昨年もフェミニズムがテーマでしたが、今後もフェミニズムやクィア・スタディーズ、トランスジェンダー・スタディーズ、男性学、ディスアビリティ・スタディーズなどと接続していくでしょう。社会運動や芸術表現との活発な交流も行われていくと思います。現在は、人々を戦争へと駆り立てる時代です。お金もない。食べるものもない。そんな窮境なのに、必要なケアをせず、誰かを敵だと思うように仕向けるような政治状況です。あらがっていきましょう。徹底的にあらがっていきましょう。でも疲れたときは休みましょう。どうか皆さん、生きてください。そして、もうこの世にいない人のことを記憶しましょう。確かに生きたあなたのことを私は憶えていたいと思います。

2023年9月3日に早稲田大学で開催されたカルチュラル・タイフーン2023のシンポジウムB「トランスジェンダーの物語とエンパワメント：連帯の歴史を記憶するために」から文字起こしをしたものです。



## 2023 年度若手研究会活動助成報告

「アート/ケア/文化政策」研究会（代表者 齋藤梨津子）

ケアに基づく民主主義やAnti-Oppressive Practice (AOP) など前年度までの対話を基盤にしながら、2023年度はこれらの概念を5人のメンバーが自身の研究/実践において展開するとともに、活動の記録化に取り組んだ。南田明美は坂上香監督『プリズン・サークル』の上映会を静岡文化芸術大学で開催し、風間勇助らをゲストに、受刑者の心の声に耳を傾ける場をひらいた（6月）。風間、南田、齋藤は大阪公立大学「EJ ART」人材育成プログラムに講師として参加、AOPを体感するワークショップを行った（7月）。齋藤は横浜で託児付きアートプロジェクトDismantling Motherhoodを運営（9～24年3月）。大蔵真由美は公民館学会で、地域の居場所づくりにAOPの分析を用いた研究成果を発表（12月）。風間は塙の内と外との交流型公募展である刑務所アート展を、年間を通じて運営した。南田はAOPを用いて外国ルーツの子どもたちとの取り組みを分析する共同研究の成果を文化政策学会で発表した（3月）。風間、南田、齋藤はジョアン.C.トロントを招いた公開研究会の記録と分析を論文にまとめ投稿した（奈良県立大学紀要『地域創造学研究』60第34巻第3号に「文化的コモンズ概念からみる民主的なケアと文化政策の接点」として掲載）。年間を通じて研究会メンバー全員でフレイレの『被抑圧者の教育学』を講読した。

「バスケットボール・スタディーズ研究会」

（代表者 松本淳也）

本研究会では、日本におけるバスケットボールのカルチュラル・スタディーズの基礎を確立することを目指し、全5回にわたり研究会を開催してきた。4月21日に開催された読書会では『バスケットボール物語』を教材として参加者間で競技の成立史について議論した。翌月の5月27日にはフィールドワークとして神戸市三宮で開催されたストリートバスケットボールイベント「Red Bull Half Court 兵庫予選」へ参加した。6月17日には第二回の読書会を実施し、4月に取り上げたテキストを読了した。

ここまでの研究会の成果を踏まえ、9月2-3日には早稲田大学で開催された学会大会「カルチュラル・タイフーン」にて、プロジェクトワークス「READ THROUGH THE BODY」を実施し、成果を公表した（8月28日にはこれに向けた準備として研究会を実施）。9月29日には参加したプロジェクトワークスの反省会を兼ねた研究会を実施し、助成年度の活動を終了した。

「歩考の科学」研究会（代表者 高原太一）

本年度の「歩考の科学」研究会では、「監獄」をテーマに以下のような活動をおこなった。2023年9月のカルチュラル・タイフーン@早稲田大学の特別企画「ブラ吉見」のため、7月21日、新宿歴史博物館にて、同館学芸員の宮沢聡氏にインタビューを実施し、関係史料を収集した。同月26日には、市ヶ谷刑務所・東京監獄跡地に建つ「刑死者慰霊塔」を調査し、並行して関連書籍の輪読をおこなった。また、追加調査として24年3月22日には、巣鴨拘置所跡地の東池袋中央公園にある「平和の碑」を見学後、隣接する造幣局跡地のイケ・サンパーク管理事務所で聞き取りをし、巣鴨拘置所排水口の石積みモニュメントを調査した。つづけて中野区にある旧豊多摩監獄表門周辺を巡検し、刑務所作業製品を展示・販売する「キャピックショップなかの」を訪問、近接する旧陸軍中野学校・警視庁警察学校跡地の東京警察病院にある碑や中野四季の森公園を調査した。そして、24年2月28日には、神戸大学塚原東吾ゼミと共同でフォーコー『監獄の誕生』の読書会をおこなった。

